

講演録

グローバルゼーションとパワーシフト

国際通貨研究所 理事長
行天豊雄

<要旨>

異文化との遭遇には、同質性と異質性のもたらす親近感と拒絶感が絶えず一緒になっている。そして、異文化交流の背景にはそれぞれの国や人の長い歴史がある。1980年代ごろから、世界の中で重要かつ奥深い変化「グローバルゼーションとパワーシフト」が起こってきた。グローバルゼーションには3つの重要な要素がある。1つ目は、東西冷戦の終結により世界がひとつになったこと、2つ目は、世界経済が金融資本主義になったこと、3つ目が情報革命による情報の共有化と双方向性が生まれたことである。今、欧米先進国からアジアを中心とするエマージングカントリーズへのパワーシフトが起きており、文化や思想の領域までに及ぼうとしている。東日本大震災で再び世界の注目を浴びている現在、日本とは、日本人とは何かを、もう一度見つめ直すときに来ているのではないだろうか。

<キーワード>

異文化交流、情報革命、金融資本主義、グローバルゼーション、パワーシフト

1. 初めての異文化体験

私の最初の異文化交流は、1956年にアメリカへ留学をしたときである。今横浜の港につないである「氷川丸」という船に乗り、3週間でシアトルに着いた。

そこで昼食をしようと思ったが、実は出発前に留学経験のある先輩から、「金がなくても栄養のバランスを考えなければいけない。ハムとレタスのサンドウィッチとチョコレートモルトというミルクシェイクのようなものを飲んでいけば栄養失調にはならない」と言われていたので、カフェテリアに入ってそれを注文しようとした。ところが、この注文がなかなか難しい。日本人は共通して「L」の発音がなかなかできない。だから「ハム エンド レタス サンドウィッチ、エンド チョコレートモルト」と、Lの発音に気をつけながら言った。しかし店員の太ったおばちゃんは私の顔を見ようともせず、「dark or white?」と聞いてきた。私の発音は通じなかったんだなと思い、もう一回「ハム エンド レタス サンドウィッチ、エンド チョコレートモルト」と言った。しかし

またおばちゃんは同じように、「dark or white?」と聞いてきた。その瞬間私は、白と黒？ 彼女は一体何を私に聞いているのだと思った。当時、アメリカでは依然として厳格な人種差別が行われており、レストランも黒人用、白人用に別れていた。つまり彼女は、私が黒人か白人か聞いているのだと思ったのだ。私はどう答えたらいいのだろうかかと悩んだ。私は黒人ではない、白人でもない。そこで私は正直に言わなければいけないと思い、「イエロー！」と言った。すると彼女はうんざりとした顔をして、後ろの棚から白いパンと黒いパンを取り出してきて、もう1度私に「dark or white?」と尋ねた。

これが私の初めての異文化との遭遇であった。私にとってこの留学の経験はとても貴重なものであり、特に夏休みに行ったジョージア州の黒人の村で過ごした経験は大きい。黒人のコミュニティの中でひと夏を過ごしたことにより、人種的な違和感がまったく無くなった。その経験により、その後60年間近くいろんな人に会ったが、その人がどこの国の人か？ 白か黒か？ ということが気にならなくなった。どこの国、人種でも、良い人もいれば悪い人もいるということを実感したのだ。そのことがこの経験から得た一番の点である。

2. 異文化交流における同質性と異質性

異文化との遭遇には、私たちの側から見て、同質性と異質性のもたらす親近感と拒絶感が絶えず一緒になっている。ただこの異文化の問題は、我々が思っているような同じことを、相手の異文化圏に属する人々も持っているのである。

これは私の個人的な経験だが、私がまだ役人をしていたとき、私の友人で経済雑誌を発行しているアメリカ人が、その雑誌で私を取り上げたいと言ってきた。表紙にも写真を載せるので羽織袴姿で来てくれと頼まれた。しかも日本のお茶、ティーセレモニーをやっているところを写したいと頼まれた。私は嫌だと断った。自分は普段は羽織袴なんか着ないし、ティーセレモニーもやらないからである。そもそも、「日本人は着物を着てお茶を点ている」というイメージのまま写るのはごめんだと思ったのだ。すると彼は、「お前の言っていることはよく分かる。しかし私の雑誌を読んで10人の内9人は、日本人は自分と違っていると思っている。私の狙いは、そういう明らかに自分とは違う日本人も、実は話してみると経済・法律など共通の舞台で話ができて、共通の考えを持っている部分もあると知ってもらうことにある。羽織袴やお茶というのは、むしろ共通性をハイライトするための道具なのだ。そのために着てくれないか」と言われた。私もそうなのかと思いOKしてしまった。そして私の羽織袴姿の写真が表紙を飾った。

しかし私はしばらく経ってから、「あれでよかったのか？」と思うようになった。あれはやっぱり断るべきだったのではないかと。私がOKした結果、アメリカの読者の得た認識は「やっぱり日本

人は自分たちと違う。違うけれども共通する部分もある」というところにとどまった。今までの日本人に対しての認識をブレイクするまでには至らなかった。むしろ、やっぱりいつも着ている背広を着て、自分の意見を堂々と述べる姿を示すべきだったのではないかと思い反省した。いまだにどちらが正しかったのか結論は出ていない。いずれにしても異文化の交流というのはこの国、誰にとっても背景に長い歴史がある。

日本にとっても異文化交流の長い歴史があり、交流がもたらしたのも時代あるいは個人によって違っている。7世紀に、有名な阿倍仲麻呂が唐の長安で高官になり、日本を想いかの地で死んでいったこと。あるいは中世16世紀の末には、天正遣欧使節団がローマやマドリードを訪問した。その4人は7年経って帰ってきたが、豊臣・徳川のキリスタン禁制政策にあってしまい、命を落とした。その中で一番熱心だと言われている中浦ジュリアンという少年はキリスタンとして捕らえられ、死刑にされた。過酷な拷問に5日間耐え、その後殉教したわけだが、彼が死の直前に言った言葉は「私はローマを見た」というものだった。彼にとってみれば、ローマで当時の西洋文化あるいは宗教を見たことの衝撃が最後まで残ったのである。近代では夏目漱石、森鴎外たちがそれぞれの立場で異文化と接し、非常に大きな衝撃・刺激を受けたのである。日本人である自分はどんな風に生きたらよいのかと彼らは悩んだ。こういう過去を見ても、異文化交流における同質性と異質性に対して、我々個人として、あるいは国としてどう対応するかということが、この問題の核心にあるような気がする。この問題について30年ほど前、1980年代ごろから、世界の中で非常に重要かつ奥深い変化が起こってきたように思う。それが「グローバルゼーションとパワーシフト」であり、今日はこれについてお話ししたいと思う。

3. 金融資本主義が生み出したもの

「グローバルゼーションとパワーシフト」、この言葉自体は皆さんもよくご存知だと思う。私の感じでは、第1のグローバルゼーションというのはいろいろと定義や解釈などがあるが、3つの重要な要素があると思う。1つは、1980年代のベルリンの壁の崩壊、ソ連邦の崩壊、それがもたらした東西冷戦の終結である。事実上は西側の勝利というかたちで東西冷戦が終わり、その意味では世界がひとつになった。

2つ目の要素は、世界経済というものが優れて金融資本主義になったのではないかということだ。金融というのは昔からあったわけだが、以前は実体経済、つまり生産とか消費とか投資とか貿易とかそういうモノとかサービスを中心に行われる実体経済をどうやったらスムーズにできるかということの補助的な役割であったのだろうと思う。ところが30年ほど前から、この金融というものが量的にも質的にも世界経済の中で非常に大きな役割を果たすようになり、今や金融と実体経済の立場

は、昔と比べればほぼ完全に逆転していると思う。ご承知の通り、今世界のGDPの総額は50～60兆ドルだが、金融資産の残高はおそらくその十倍くらいになっている。そして、ありとあらゆる金融関係のマーケットが生まれている。

この金融資本主義化が文化的な面で何をもたらしたのかということを考えると、第1には世界中が単一のマーケットになったこと。つまり経済様相の全てが自由に世界に移動するようになった。比喩的に言えば、世界がひとつになったということである。文化的な面でも金融資本の下でどういものが大事に思われるようになったかといえば、できるだけ自由がよい、できるだけ効率が高いほうがいい、つまり、自由とか効率とかということが重要な文化の要素になってきた。さらに金融資本主義の下では、金銭的な欲望、貨幣的な価値を極大化したい、そういう欲望が全ての価値観の根底になるかのような状況が現出している。

要するに金融資本主義化によって世界中がひとつになり、そこでは特定の価値観や文化感というものが生まれてきている。確かに金融の優位、金融資本主義化というのは、世界的に見て所得を増やし、雇用を増やした。結果として生活水準が向上したという面では世界にとって大きな果実をもたらしたことは事実であろう。しかしながら反面、金融資本主義がもたらした結果というものは、例えばリスクというものに対する感覚を麻痺させてしまう。要するに博打に似たような活動が世界経済を支配するようになってきてしまった。金のためならなんでもする、才能と努力があれば20代のファンドマネージャーが何百億を稼ぐこともできる。それはまさに社会のヒーローになる。しかし一方で、社会的な倫理感の問題など、いろんな意味でマイナスの面を持ったことも事実だ。2007年に始まったサブプライムローンの危機は、その後4年経った現在でも依然として解決していない。同じ資産バブルがはじけたということであつたにも関わらず、バブルが起こった背景がそれまでとは変わってしまった。それが今回の危機が長引き、今なお完全な解決の目途がついていない原因であろうと思う。

4. 情報革命による情報の共有と双方向性

グローバリゼーションの3番目のエレメントは、世界が情報社会になったことだと思う。この背景にはコンピューター技術があると思うが、それによって情報革命というものが起こった。

情報革命が具体的にもたらしたことは情報の共有である。今回の情報革命が起こる前は、政府にしても企業にしてもトップが情報を独占していた。100%ではないが主要な部分を上が握っていた。この情報の寡占・独占が政府なり経営の権威・オーソリティーの源泉になっていた。ところが情報革命の結果、ほとんど全ての情報が瞬時に数多くの利益共有者に共有されるようになってしまった。つまり情報の独占が打破された。これは非常に大きな社会的・政治的・経済的な意味を持つ出来事

であった。つまり今までのように上に立つものが、「これを知っているのは俺だけだ」ということで下を抑えるということはできなくなってきた。のみならず、下のほうは自分たちの発する情報によって上を変えるという力すら生じている。つまり情報の双方向性というものが生まれてきている。

今年の初めから世界中で起こったいわゆるアラブの春、オレンジレボリューションと言われていることを見れば、インターネットという情報の手段によって多数の大衆が自分たちの意見を発信し、それによって政治的な現実の力を生み出してきている。場合によっては政権の交代を達成している。情報革命によって情報の共有と双方向性というものが生まれ、ある意味では政府なり企業なりのガバナンスのスタイルをまったく変えてしまっている。これはこれから非常に大きな意味合いを持つてくるのだろうと思う。

グローバリゼーションは、結果としては異文化感の共通項というものを非常に大きく拡大したと言える。要するにもう世界が均一でかつ平坦になってしまった。昔のように山あり谷あり小さな村ありというようなことはもうなくなった。こういうようなことが言われるようになったのも、やはりグローバリゼーションということが持つ、異文化感の共通項の拡大という話だったのだと思う。

5. エマージングカントリーズへのパワーシフト

ところがもうひとつの変化、パワーシフトというのはそれとかなり違った影響を及ぼしているのではないと思う。パワーシフトというのは話すまでもなく、やはりここ 20～30 年に世界で起きている世界の力の重心の変化。具体的に言えば、欧米先進国からアジアを中心とするエマージングエコノミーへの転化、政治的に言えば昔ながらの G7 から G20 への力の影響力のシフト。さらに具体的に言えば米国から中国への覇権的な地位の転化など、いろいろな意味で使われている。しかし要するにこのパワーシフトの背景に起こったことというのは、今まで力を持っていた国あるいはグループというものが、いろんな意味でその力を消失した。それと同時に反対のグループが力をつけてきているということである。

従来の秩序の中心であった米国は、ここ 20～30 年の間、経済的には財政赤字、対外赤字がだんだんと大きくなって、もうすぐ制御不能の状態になろうとしている。それからジオポリティクスの方で言えば、イランとかアフガニスタン政策の失敗で国際的なセンターとしてのパワーを失ってきている。さらに深刻なのは、アメリカの社会（アメリカンドリーム）の強さが腐蝕をしてきている。こういったいろいろな原因によってアメリカの力が弱っている。

他の先進国、EU と日本はどうであろうか。EU は戦後、統合の成果を達成したまではよかったが、ここ数年構造的な矛盾が出てきている。世界における EU の影響力には最近問題がある。日本もかつては Japan as No.1 と言われていたが、ここ 20 年の長いデフレその他があり、国際的なステータ

スはだんだんとなくなってきてしまっている。こういう先進国グループの力の衰えに対して、新興国、特に中国が非常に刮目すべき発展を遂げてきている。

考えてみると最近の中国の発展というのは、優れて1980年代以来の鄧小平という天才の力によるところが非常に大きい。彼の行った「改革・開放政策」の中心は、共産党という政党による独裁政権を維持しつつ、他方では一般大衆に物質的な欲望を開放したことである。この2つの、政治的な独裁性の維持と大衆の物質的欲望の開放とを並立して行ってきた。これは、天才的な政治家である鄧小平の存在と、改革・開放政策が功を奏したという面が非常に大きい。

その他インド、ブラジルなどなどエマージングカントリーズが中国のあとを追って発展をしている。その結果、全体として世界的なパワーシフトが生じている。このパワーシフトというのは当初は経済の面で起こる。生産、消費、投資、貿易、そういった経済面で中国を始めとする新興国の力が非常に大きくなってきた。この意味ではこの局面は完成してきている。今さまざまな分野の製品を見ても世界のトップは中国製が多いし、その他さまざまな指標を使ってみても、このエマージングエコノミーズの経済力としての圧倒的な地位はかなり確立している。

6. パワーシフトの第3段階

今やパワーシフトは次の段階に進んでいる。次の段階というのはソフトの世界だと思う。技術であるとか、経営処方であるとか、特許の問題であるとか、経済を中心としたソフトの分野でパワーシフトが徐々に起こっている現状のことである。このパワーシフトが今後も続いていけば、いずれは第3の段階に入る可能性がある。その第3の段階とは、まさに文化の世界である。イデオロギーの世界であり、思想の世界である。そこまでパワーシフトが起こってくるかどうか、全世界にとってのこれからの関心事項というか、重大な問題だろうと思う。つまり今まで、冷戦終結後の世界は、ワシントン・コンセンサスと呼ばれるところもあるけれども、西洋文明を起源とするものの考え方、その中にはデモクラシーであるとか、あるいは個人的な人権の問題であるとか、あるいは多数政党制の問題であるとか、思想とか表現の自由の問題であるとか、広い意味での西欧文明と呼ばれるものがその中心になってきているわけである。

こういうことがパワーシフトに伴って何か影響を受けるのであろうか、受けるとするとそれはどういうかたちになるのだろうか、といったことに非常に大きな関心が向けられる。現に、特に発展が一番目覚ましいアジアにおいては、こういう伝統的な西欧文明に対する批判が出てきている。つまり、アジアの著名な文化人や政治家たちの口から最近よく聞かれることは、欧米の人たちはもう我々を説教することはやめたらどうだと、今まで我々は何世紀もあなた方のご託宣を聞いてきたけれども、そのあなた方自身が今非常にお粗末な話になってきているであろうと。だからもう我々を指導

しようとすることはやめてはどうかと言う。これからはそういった考えが世界の主流になるという感じが相当ある。問題なのは確かに従来の教条主義的な西欧文明観が、デモクラシーとか、人権とかいろいろな問題について、あるいは市場主義といったようなものについての西欧文明に発したものの考え方がエゴイスティックになってきていたことは事実だろう。いわゆるワシントン・コンセンサスなんて言われたものは、その典型だと思う。したがってそれに対して疑念や疑いが起こるのは当然である。

問題はそういう西洋的な価値観に対して Asian value とアジアが言ってきたときも、Asian value っていったい何なんだろう。その value を生み出しているものはいったい何なんだろうということが、実はまったく答えが出されていないわけである。むしろ西洋文明の側から言えば、アジアというのは無思想、無倫理の地域だと思われる。私はそれが必ずしも間違っていたとも思えない。アジア的なものの考え方というのは、「はっきりさせない、まあまあ、なあなあ」。言葉は非常にスムーズであるけれども、妥協だとか話し合いだとか馴れ合いだとか、要するに西洋的な倫理性というものの反対側にあるような印象を西洋文明の立場から持たれているのは事実であり、この問題は非常に厄介というか大変な問題であろうと思う。

特にこの問題は日本にとって深刻な話なのではないかと思う。日本の歴史を見ると、異文化との交流ということが非常に大事な大きな役割を果たしてきた。19世紀に鎖国体制を廃し、開国をしたときから、日本でもこの問題が非常に大きく意識をされるようになって、当時の知識人たちは、やはり押し寄せる異文化の力に対して、いったい自分たちはどうやってこれに対応していったらいいのか、どう生きていったら良いのかということを非常に真剣に考えていたわけである。この明治以来の我々の先人たちの悩みというのはほとんど解決していない。『和魂洋才』って何なの？』と。答えはない。『和魂』というのは何ですか？ 『洋才』というのは何ですか？』ということは誰にも解明できなかった。それと、日本にとって同じくらい大事なものは、我々が異文化と考えるべきものは決して欧米だけではないということだ。

7. 「日本人」と「日本の国・文化」の再考

よくアジア、アジアと言うけれど、実はアジアというものの実体はあるのだろうかということと思う。例えば、日本と中国、日本と韓国、日本と東南アジアの国々とひと括りにして言っても、実はそれぞれ違う。あまり日本がアジア、アジアというのはある意味で危険なのではないかと思う。我々は自分たちと欧米との関係を考えるのと同じように、日本と中国、日本と韓国、日本と東南アジアということも、欧米との関係を考える時と同様に考えなければならないのではないかと思う。

私は60年代にマニラのアジア開発銀行で4年ほど働いていた。国際機関であるから、アジアのい

ろんな国から職員が来ていた。一体アジアで初めてできた本格的な国際機関をどうやって運営するか、どういう経営の理念を持ったら良いかということで、ずいぶん活発な議論が行われた。私もいろいろなマニラの人と付き合っ、日本という国が、単に対欧米だけではなくてアジアの中でも同質なものと同時に異質なものも持っているなど強く感じた。それは日本という国の歴史や発展のプロセスがアジアの他の国と比べて非常に違った面があるからだ。試行錯誤の中で、日本人というのは思想の面で、ものの考え方の面で、これは絶対に失ってはいけないというもの、絶対に守らなければいけないというものがあるのかなど。もしあるとすればそれは一体何なのか、それはどうやって守っていけるのか、というようなことを考えていた。もちろん答えは出なかったが、当時の思いが今回の東北の大地震の経験を経て、もう一回よみがえってきた。

今度の大地震の後で、国際的に存在感が低下する一方だった日本が、再び世界のライトを浴びた。浴び方は80年代のNo.1の時代とまるで違っていたが、少なくとも世界の人たちが大震災を機会に、もう一度日本という国はどのような国なのか、日本人とはどのような人間なのかということを考えさせられた出来事だったわけである。今までのところ、世界の人々の日本観は決して悪くはない。これは阪神大震災のときでもそうだが、今回の事件で日本人とか日本社会が持っている「the spirit of resilience」あるいは「the spirit of perseverance」という言葉は世界中に非常に大きな印象・感銘を与えてきている。

また、今度の震災でローカルコミュニティが持っている力というのがいかに大きなものかということが分かった。日本のローカルコミュニティの力は強く、他の先進国と比べればよく維持されていた。それがこれから間違いなく維持され強化されていく環境があるのかというと、非常に危機感を持つ。現に今度の震災で町とか村は完全に破壊されてしまった。また以前のような昔ながらのコミュニティをつくるということは事実上不可能となってしまった。日本社会全体の中でも少子化、成長率の低下ということで、昔ながらのローカルコミュニティが持っていた力が復活するという保障はまったくなく、むしろ失われてしまうのではないのかという危機感のほうが強い。今回の震災というのは、物理的・経済的な修復に加えて、広い社会的・文化的な意味での再建復興というのも考えなければならないと思う。この異文化の話というのは、日本の歴史が始まって以来、ずっと我々がその中で生きてきた課題であったわけだが、それが20世紀・21世紀に再び大きな課題になってきている。ある意味ではこれも歴史のひとつの天意だと感じる。これからの世代にとって大きな課題があると思っている。

私は最近外国で話をさせられるといつも言うが、大体日本という国は、この60年間あなたたちが考えている以上に次から次へと不幸なことが多かった。1945年にはアメリカに原子爆弾を落とされ、以後も汚染の話であるとか、70年代であれば石油危機であるとか、あるいは台風とか地震とか、人

口減少とか、あるいは世界で一番長いデフレだとか、次から次へといろんなことが起こり、本当ならとっくの昔に滅亡しても不思議ではなかったのに、なんとか生き延びている。おそらく今回の震災に対してもカムバックできると思うよ、と話している。そういう話をすると欧米人は万雷の拍手をもって応えてくれる。これがこの日本の広い意味での文化というものであり、それを世界の中でどうやって守っていくかということではないだろうか。